日本の大学の世界ランキング低下を考える (2017-9-21)

先日、英国の教育専門誌(Times Higher Education World University Rankings)が、本年度の「世界大学ランキング」を発表している。それによると、日本の大学では、100位以内に入っている大学は2校で、東大46位、京大77位である。ちなみに、昨年は、東大39位、京大91位であった。また、本年度のランクでは、東大、京大以外の日本の大学で200位以内に入っているものはない。

今回の英国教育専門誌の調査の指標には、「教育」、「研究」、「論文の被引用数」、「国際性」、「企業からの収入」が使われている。産経新聞(2017年9月13日)の記事をみると、見出しは「産学のバトンパスを磨け」となっていて、日本の大学は企業からの収入が少ないことが、順位の低下に繋がっているとされている。もっともなことである。例えば、世界ランク3位のスタンフォード大学の2016-2017年の寄付をみると、約1,700億円(世界の大学ではトップ)である。ちなみに、同大学全体の年間予算は約6,600億円で、岡山大学の約10倍である(東大は約2,300億円)。でも、日本の大学のランキング低下には予算以外にも原因があるのではないかと思う。

その第1の原因として、近年の日本の大学改革が挙げられると思う。 日本では、20世紀終わり頃から大学の改革が声高になり、1998年には、 大学審議会から、「21世紀の大学像と今後の改革方策として、「競争的環境の中で個性が輝く大学—」が提案された。当時、私はこの提案は素晴ら しいと思った。各大学が創意工夫を重ねて頑張るのは良いことであろう。

その後、大学改革の一環として、2002 年に国立大学が法人化され、それに伴い、大学の中期目標の設定、認証評価などの制度が導入された。また、「スーパーグローバル大学」の選定も行われた。その後の結果をみると、各大学は競争的環境の中で個性が輝くものではなく、むしろ文科省の支配が強まり画一的方向に進んでいる感じを受ける。また、大学の教員は、中期目標や認証評価などの多くの資料作りに忙しそうで、本来の教育・研究

に充てる時間が少なくなっている。そして、現在の日本大学あり方は、や やもすれば短期的に結果のでるようなものに傾いているようである。

大学が社会から遊離した象牙の塔になることには問題があるが、しかし、深い思索の下にアカデミックな環境で教育・研究が行われるべき大学の本来の姿が失われて来ているのではないかと心配である。法人化以後の日本の大学の改革が、果たして世界で競争できる体制であるのか、至急に検証する必要があると思う。

第2の原因は大学の組織に問題があると思う。組織が旧態依然としたものを引きずっているのではないか。例えば、1946年に岡山大学医学部が27講座で発足して以来、時代の進歩に合わせて現在47講座に増えてきたが、当然のことながら、時代に合わない古い講座もあるのではないか。古いものにやたらに新しいものを付け加えただけでは競争に勝てそうにない。例えば、現在のスタンフォード大学医学部の講座をみると、古い講座のいくつか(例えば解剖学講座など)はなくなり、新しい時代にマッチした遺伝子工学、発生学、システム生物学、遺伝学、構造生物学などの講座ができている。このような組織の改変で、優秀な教員のみならず、学生も集まる。話は脱線するが、スタンフォード大学医学部には、現在4人のノーベル賞受賞者がいる。このほか、最近までポール・バーグ(遺伝子組み換え)、アーサー・コーンバーク(DNA合成)もいた。

いま、医学部の組織の古さを述べたが、他の学部も同様の問題があるのではないであろうか。日本では、いったん作ったものを無くすることが大変むずかしい風土がある。日本の大学の活性化には、思い切った組織の見直しが必要であろう。

今回は、日本の大学の世界ランキングが年々低下する原因を考えてみた。 大学の現場におられる教職員の方々が危機感をもって対処されることを 期待している。

(岡山医学同窓会報 123号、2017) より